

## 研究ノート

### 男女共学制が戦後の日本人のジェンダー平等意識に 与えた影響に関する調査研究

橋本紀子<sup>1)</sup>、茂木輝順<sup>1)</sup>、井上恵美子<sup>2)</sup>、森岡真梨<sup>1)</sup>、良香織<sup>3)</sup>

1) 女子栄養大学 2) フェリス女学院大学 3) 宇都宮大学

#### 1. はじめに

本稿は、平成 21～23 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究」(研究代表者橋本紀子、課題番号 21330183)の一環として行われた世代別インタビュー調査にもとづいた研究ノートである。既に、前述の科研調査報告書は昨 2012 年 3 月にまとめられ、それに、基づいて、8 月の日本教育学会第 71 回大会でも発表した。そこで、出された意見やその後の、追加調査等によって、新たな知見が加えられている。特に、学会報告では、時間の関係上、第 3 世代以降の報告だけで、戦後直後～第 2 世代までは省略したこともあって、本稿を作成することにした。

#### (一) 研究目的と世代別インタビュー調査の意義

第二次大戦後、日本に男女共学制が導入されてから、既に、60 数年が経っている。学校教育は、教育理念、教育目的、教育内容、教育方法を含めて、戦前とは大きく変わったが、中でも、男女共学は、別学時代とは異なる学校体験を、そこで学んだ子どもたちに与えた。それは、思春期を迎えた中学、高校生にとって、異性の実像にふれる良い機会となり、戦後の民主教育と共に、ジェンダー平等意識・人間観形成に影響を及ぼしたと思われる。しかし、その影響の仕方は、時代の推移とともに、変化しており、一様ではない。

戦後の男女共学制に関しては、“戦後公教育

における男女共学制の導入は、たんに女性を男性基準に合わせようとしただけであって、結局、それは男女特性論を乗り越えるものではなかったという” というような(小山静子他編著『戦後公教育の成立—京都における中等教育』世織書房 2005 年)見解もあるが、筆者はこれまでの資料調査、地域調査から、それは、主に旧制中学系譜の高校にある時代まで、現れた側面を言い当てているが、それ以外の側面があったことを見落としてはいけないと考えている。とりわけ、男女共学制が以後の人々のジェンダー平等意識・人間観形成に与えた影響は、非常に、大きく深いものであったと思う。つまり、これは、旧制中学・高女系を前身とする学校か、新設の高校か、職業課程を含む総合制高校か、また、どの世代かによっても、その現れ方には違いがあるものの、それまでの男女観、人間観に少なからぬ影響を与える制度であった。

それゆえ、本稿の研究目的は、戦後の男女共学制度が、日本人のジェンダー平等意識の形成にどのような影響を与えてきたかを、世代別の違いに着目しながら明らかにすることである。予備調査によって、学習指導要領の改訂・施行年、特に家庭科の取り扱いの違いが人々のジェンダー平等意識に与えていた影響の大きさが明らかになったので、まずは、学習指導要領と生まれた年度の対応表を基に、世代分け時期区分を行う。

人々のジェンダー平等意識は、学校教育だけではなく、家庭や職場、地域社会での平等のありようからも、当然、影響を受けており、

とりわけ、国際女性年、女性差別撤廃条約、男女雇用機会均等法、男女共同参画社会基本法等の内外のジェンダー平等関連の法整備からも大きな影響を受けている。

したがって、世代分け区分にも、また、それぞれの世代の分析の際にも、これらジェンダー平等関連の法や、高度経済成長、長期不況と非正規雇用の増大などの社会事象の影響を考慮する必要がある。今後、世代分けの指標の精緻化が一層、求められるであろう。次に、それらを考慮しながら、世代分け区分の根拠とその時代の特徴をあげることにする。

## (二) 研究方法

### (1) ヒヤリング対象者を世代別にグループ化する

世代別調査のための世代分け指標として、予備調査で浮かび上がってきた、学習指導要領の改訂・施行年をもとに、特に家庭科の変遷に着目して、生まれた年度によって、以下の通り、戦後直後世代、第一～第五世代の6グループに世代を分けた。学習指導要領と生まれた年度の対応表は次ページに掲載した。

①戦後直後世代(1930～1939 年度生まれ)：尋常小学校や(1941 年度から)国民学校、旧制中学や高等女学校などの戦前の教育制度と、戦後の教育制度をともに経験している世代である。1932～33 年度生まれを中心に併設中学校の経験者もいる。(ただし、以下の場合には戦後の教育制度を経験していない。(1)旧制中等学校へ進学していない(義務教育のみで修了している)場合。(2)1947 年度(昭和 22 年度)の旧制中等学校の 5 年生は、旧制中等学校の卒業と、新制高等学校の 3 年生への進級とを選択することができたため、卒業を選択した場合)。

②第一世代(1940～1946 年度生まれ)：1 年生から国民学校ではなく、新制小学校に入学し、戦前の教育制度は経験していない世代である。1956 年改訂高校学習指導要領で

は「女子については『家庭科』の 4 単位を履修させることが望ましい」とされていたため、家庭科を履修していない女性もいる。

③第二世代(1947～1956 年度生まれ)：1960 年高校学習指導要領改訂(1963 年施行)で「家庭科については(中略)女子には原則として『家庭一般』を必修」とされる。中学校では、1958 年学習指導要領改訂(1962 年施行)によって、男子向きと女子向きに二系列化された「技術・家庭科」が誕生。

④第三世代(1957～1965 年度生まれ)：1970 年高校学習指導要領改訂(1973 年施行)で普通科では「『家庭一般』は、すべての女子に履修させるものとし、その単位数は、4 単位を下らないようにすること」となる。中学校の技術・家庭科は男女別の二系列のまま。

⑤第四世代(1966～1977 年度生まれ)：1977 年中学校学習指導要領改訂(1981 年施行)で技術・家庭科の相互乗り入れが開始される。高校の家庭科は女子のみ必修のまま。

⑥第五世代(1978～1986 年度生まれ)：1989 年の学習指導要領の改訂で、高校では 1994 年から「家庭一般」「生活一般」「生活技術」の中から 1 科目が選択必修となり、男女とも家庭科が必修となる。中学校では 1993 年から技術・家庭科の男女の区別がなくなり、学習指導要領上の男女差別が解消された。

### (2) 半構造化面接法による世代別インタビュー調査

対象者：新制高校の卒業生で、必ずしも男女共学体験者ばかりではなく、男子校、女子校、併学高校卒業生も対象とした。理由は、残存する別学高校体験者の学校体験を聞くことによって、それぞれの時代の共学高校の学校体験を相対化し、別学校との比較も含めて、その特徴を明らかにできるからである。

面接方法：事前に、本研究の趣旨と調査内容、倫理的配慮、調査協力依頼等を記した文書を送付して、協力依頼の承諾があった者を対象

# 学習指導要領と生まれた年度の対応表 ※数字は、学習指導要領の施行年(西暦)の下2桁

生まれた年度	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	高卒年	備考		
直後世代	1930 (S5)	尋小1	尋小2	尋小3	尋小4	国初5	国初6	旧中1	旧中2	旧中3	旧中4	旧中5	48	1949	戦時中	
	1931 (S6)	尋小1	尋小2	尋小3	国初4	国初5	国初6	旧中1	旧中2	旧中3	旧中4		48	49	1950	終戦年(1945年)
	1932 (S7)	尋小1	尋小2	国初3	国初4	国初5	国初6	旧中1	旧中2	47	48	49	49	49	1951	終戦直後
	1933 (S8)	尋小1	国初2	国初3	国初4	国初5	国初6	旧中1	47	47	49	49	49	49	1952	新学校制度
	1934 (S9)	国初1	国初2	国初3	国初4	国初5	国初6	47	47	47	49	49	49	49	1953	併設中学が設置されていた期間
	1935 (S10)	国初1	国初2	国初3	国初4	国初5		47	47	47	49	49	49	49	1954	小・中学校1947年発足
	1936 (S11)	国初1	国初2	国初3	国初4	47	47	47	47	51	49	49	49	49	1955	高校1948年発足
	1937 (S12)	国初1	国初2	国初3	47	47	47	47	51	51	49	49	49	49	1956	高校1949年変更
	1938 (S13)	国初1	国初2	47	47	47	47	51	51	51	49	49	49	49	1957	中学1951年変更
	1939 (S14)	国初1	47	47	47	47	51	51	51	51	49	49	49	49	1958	
第一世代	1940 (S15)	47	47	47	47	51	51	51	51	51	56	56	56	56	1959	高校1956年変更
	1941 (S16)	47	47	47	51	51	51	51	51	51	56	56	56	56	1960	
	1942 (S17)	47	47	51	51	51	51	51	51	51	56	56	56	56	1961	
	1943 (S18)	47	51	51	51	51	51	51	51	51	56	56	56	56	1962	
	1944 (S19)	51	51	51	51	51	51	57	57	57	56	56	56	56	1963	中学1957年変更
	1945 (S20)	51	51	51	51	51	51	57	57	57	56	56	56	56	1964	
	1946 (S21)	51	51	51	51	51	51	57	57	57	56	56	56	56	1965	
第二世代	1947 (S22)	51	51	51	51	51	51	57	57	62	63	63	63	63	1966	系統的学習
	1948 (S23)	51	51	51	51	51	51	57	62	62	63	63	63	63	1967	小学校1961年開始
	1949 (S24)	51	51	51	51	51	61	62	62	62	63	63	63	63	1968	中学校1962年開始
	1950 (S25)	51	51	51	51	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1969	高校1963年開始
	1951 (S26)	51	51	51	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1970	
	1952 (S27)	51	51	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1971	
	1953 (S28)	51	61	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1972	
	1954 (S29)	61	61	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1973	
	1955 (S30)	61	61	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1974	
	1956 (S31)	61	61	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63	1975	
第三世代	1957 (S32)	61	61	61	61	61	61	62	62	72	73	73	73	73	1976	教育の現代化
	1958 (S33)	61	61	61	61	61	61	62	72	72	73	73	73	73	1977	小学校1971年開始
	1959 (S34)	61	61	61	61	61	71	72	72	72	73	73	73	73	1978	中学校1972年開始
	1960 (S35)	61	61	61	61	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1979	高校1973年開始
	1961 (S36)	61	61	61	71	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1980	
	1962 (S37)	61	61	71	71	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1981	
	1963 (S38)	61	71	71	71	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1982	
	1964 (S39)	71	71	71	71	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1983	
	1965 (S40)	71	71	71	71	71	71	72	72	72	73	73	73	73	1984	
第四世代	1966 (S41)	71	71	71	71	71	71	72	72	81	82	82	82	82	1985	第1次ゆとり教育
	1967 (S42)	71	71	71	71	71	71	72	81	81	82	82	82	82	1986	小学校1980年開始
	1968 (S43)	71	71	71	71	71	80	81	81	81	82	82	82	82	1987	中学校1981年開始
	1969 (S44)	71	71	71	71	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1988	高校1982年開始
	1970 (S45)	71	71	71	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1989	
	1971 (S46)	71	71	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1990	
	1972 (S47)	71	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1991	
	1973 (S48)	80	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1992	
	1974 (S49)	80	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1993	
	1975 (S50)	80	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1994	
	1976 (S51)	80	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1995	
	1977 (S52)	80	80	80	80	80	80	81	81	81	82	82	82	82	1996	
第五世代	1978 (S53)	80	80	80	80	80	80	81	81	93	94	94	94	94	1997	新学力観
	1979 (S54)	80	80	80	80	80	80	81	93	93	94	94	94	94	1998	小学校1992年開始
	1980 (S55)	80	80	80	80	80	92	93	93	93	94	94	94	94	1999	中学校1993年開始
	1981 (S56)	80	80	80	80	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2000	高校1994年開始
	1982 (S57)	80	80	80	92	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2001	
	1983 (S58)	80	80	92	92	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2002	
	1984 (S59)	80	92	92	92	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2003	
	1985 (S60)	92	92	92	92	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2004	
	1986 (S61)	92	92	92	92	92	92	93	93	93	94	94	94	94	2005	
第六世代	1987 (S62)	92	92	92	92	92	92	93	93	02	03	03	03	03	2006	生きる力
	1988 (S63)	92	92	92	92	92	92	93	02	02	03	03	03	03	2007	小学校2002年開始
	1989 (H1)	92	92	92	92	92	92	02	02	02	03	03	03	03	2008	中学校2002年開始
	1990 (H2)	92	92	92	92	92	02	02	02	02	03	03	03	03	2009	高校2003年開始
	1991 (H3)	92	92	92	92	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2010	
	1992 (H4)	92	92	92	02	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2011	
	1993 (H5)	92	92	02	02	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2012	
	1994 (H6)	92	02	02	02	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2013	今年度(2012年度)
	1995 (H7)	02	02	02	02	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2014	
	1996 (H8)	02	02	02	02	02	02	02	02	02	03	03	03	03	2015	
第七世代	1997 (H9)	02	02	02	02	02	02	02	02	12	13	13	13	13	2016	脱ゆとり
	1998 (H10)	02	02	02	02	02	02	02	12	12	13	13	13	13	2017	小学校2011年開始
	1999 (H11)	02	02	02	02	02	11	12	12	12	13	13	13	13	2018	中学校2012年開始
	2000 (H12)	02	02	02	02	11	11	12	12	12	13	13	13	13	2019	高校2013年開始

とした。上述の時期区分に該当する世代別インタビュー調査を各地で、主に、2～10人の座談会形式で行った。首都圏の対象者の場合は、こちらで指定した場所で行ったが、集団ではなく個別インタビューになる場合もあった。

インタビューガイド：主な質問内容は以下の通りである。

生まれた年度の確認／入学した学校名／男女比について、男女で校舎が違っていたか、クラス編成は共学だったか、女子クラス、男子クラスがあったか。／どんなカリキュラムで学んだか。家庭科や体育についてはどうだったか。男女で違っていたか。／クラブ活動、学校行事等はどのように行われていたか。印象に残ったこと／校旗、校歌、校訓について／当時の男性、女性の役割意識や文化状況についてなど。

### (3) 調査期間と調査場所

2010年2月～2013年3月にかけて、6つの世代あわせて計14回

<直後世代>

(1) 福岡県立東筑高等学校(女性2名男性4名)卒業生 2010年2月9日実施

(2) 秋田県立横手城南高等学校卒業生(女性)への調査 2010年2月21日実施

(3) 京都府立福知山高等学校(女性)、京都市立堀川高等学校定時制(女性)、富山県立富山南部高校(女性) 卒業生 2010年3月18日実施

(4) 山口県立豊浦高等学校卒業生(男性) 2010年8月19日実施

(5) 岩手県立盛岡第二高等学校卒業生(男性2名) 2011年8月17日実施

(6) 愛知県名古屋市立菊里高等学校卒業生(女性) 2012年1月2日実施

<第一世代>

(1) 2011年4月28日実施

新潟県立十日町高等学校(女性)、東京都立竹

早高等学校(女性)、川崎市立橘高等学校(女性)、各卒業生

(2) 2011年12月22日実施

岩手県立盛岡第一高等学校(女性)、東京都立豊島高等学校(女性)、東京都立小石川高等学校(女性)、埼玉県立行田女子高等学校(女性)、各卒業生

<第二世代>2011年12月～2013年3月にかけて個別に実施

千葉県立御宿家政高等学校(女性)、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校(男性)、東京都立北高等学校(男性)、東京都立南葛飾高等学校(女性)、各卒業生

<第三世代>2012年1月6日実施

愛知県立瑞陵高等学校(女性)、福岡県立小倉高等学校(男性)、埼玉県立大宮高等学校(女性)、埼玉県立熊谷高等学校(男性)、埼玉県立川越女子高等学校(女性)、埼玉県立蕨高等学校(男性)、[東京都 私立]富士見中学高等学校(女性)、各卒業生

<第四世代>2012年1月21日実施

公立女子校(群馬県 女性)、私立男子校(3年生のときに共学化)(東京都 男性)、公立共学校(千葉県 男性)、私立女子校(東京都 女性)、公立共学校(宮崎県 女性)、各卒業生の計5名

<第五世代>2011年12月11日実施

公立女子校(宮城県 女性)、公立共学校(埼玉県 女性)、公立男子校(埼玉県 男性)、公立共学校(香川県 女性)、各卒業生の計4名

以下、各世代の調査結果と考察を記す。

## 2. 調査結果の概要

<戦後直後世代>

旧制中学、高女からの移行期、併設中学経験者等、1933-39年度生まれで、高卒年は1949-58年である。

調査対象者の出身高校は、当時、女子校で

あった横手城南高校と、共学後数年で男子校に移行した豊浦高校以外は、すべて共学高校である。ただし、盛岡第二高校は、共学後10年ほどで実質女子校に戻り、現在も女子校の学校である。東筑高校、富山南部高校は、旧制中学と高女等の統合校だったが、旧制中学の伝統を引き継いでいる高校で、福知山高校は旧制中学、高女、農学校の3校統合校、市立高女の系譜を引くのは、堀川高校と菊里高校である。

インタビューを通じて、この世代に共通していたのは、**戦時下からの解放感がみなぎっていた**ことである。制度的には共学制移行時の混乱と困難があり、母体となった前身の学校の伝統に影響される側面をもったが、1年前まで、軍事教練をしていた運動場で、女生徒とフォークダンスをするなど、急激な変化を体験している。学校によっては、男女別校舎という移行期の別学状況もあったが、多くは、通学にまつわる男女の制限がなくなり、フォークダンスも一緒に踊る、授業も一緒に受け、部活も一緒にするという変化が始まっていた。

直後世代の共学初体験の特徴を、この科研の一員であった木村浩則は、東筑高等学校のインタビューに即して、次のように指摘している。

第一に、男子生徒の反応は、「異性の存在に強い関心をもちながらも、大きな戸惑いを感じるというアンヴィバレントな感情を抱えていたようだ」として、フォークダンスで、初めて女性の手を握ったときの強烈な印象を語った男性と、男性が多くて、女性に当たらなかった男性の「ほっとした反面羨ましいなという両方の考えが働いた」という発言を引き、「『ほっとした』という感情と『羨ましい』という感情、このアンヴィバレントに当時の男子生徒の心境がよくあらわれている」(注:報告書P35)と分析している。

さらに、「そもそもフォークダンスは、戦後、

日本社会に民主主義を広める道具とみなされ、普及していった。GHQと文部省は、各都道府県の教育委員会を通じて、フォークダンスの普及に努めた。学校現場では、学習指導要領によってフォークダンスの学習が浸透していった。1953年の小学校学習指導要領(試案)には、『リズムや身振りの遊びとリズム運動』の項目に『民主的態度の育成』があり、フォークダンスの目的に『楽しみながら、新しい男女関係の基礎をつくる』とある(注:同上)という紹介がなされている。

第二に、女子生徒の反応は、「共学化に対して男子ほど戸惑いや抵抗を感じてはいなかったようである。ある女性は『東筑は、父親や兄弟も行った学校だから』と、その校名に親しみさえ感じていた。女子にとって男子と同じ学校に入るということは、ある種のステップアップとしてとらえられたのかもしれない」と指摘している。

第三に、(旧)教育基本法にあった男女共学の理念を実質化しようと努める教師の姿を、男女交互の席順にするなど、極力男女の接する機会を増やそうと努力していた担任教師の話から捉えている。

さらに、小学生時代にたまたま体験した「男女共学」によって、女子の存在にそれほど戸惑わなかったと語る男性の発言から、共学体験が同世代の生徒とは異なった異性に対する意識を生み出していた点に注目し、「ここに改めて共学経験というものの教育的意義を見出すことができるのではないだろうか」と指摘し、「新たな男女共学制のもとで生徒たちが経験した期待と不安、戸惑いのなかには、彼ら彼女らが旧来の男女の関係性を乗り越えていく重要な契機が含まれていた」のではないかと分析している。

東筑高校に即して、木村が分析しているような当時の生徒たちの不安や戸惑いなどは、全国各地の多くの高校で見られた光景だったし、確かに、旧来の男女の関係性を乗り越え

ていく重要な契機が含まれていたことも事実だと考えられるが、校訓・校歌・クラス編成、教科選択や教師の男女比率等細部にわたってジェンダー平等の視点から検討すると、さまざまな、問題が浮かび上がってくる。次にその点も含めて、直後世代の特徴について述べることにしよう。

まず、**教科選択上の男女差**についていえば、共学高校でも、家庭科関連科目は、ほとんど女子が選択していたし、たとえば、福知山高校の場合、女子のみ多くの家庭科関連の選択科目があり、担任の男性教諭も科目選択の際に、女子には「一般家庭」を取るようとの助言があった。また、その他の科目でも男女の進路を考えて異なる助言をしていたという。横手城南高校生の場合も母親は、洋裁学校か、裁縫や調理技術が学べる高校の家庭科コースを勧めたが、本人はその道は不得手でむしろ、英語や国語などの普通科目をより多く選択している。その背景には、女性でも、「手に職をつける」から、「より高い学歴を獲得」し、公的機関や民間企業に就職して、自立する時代へと動き出していたことが考えられる。

富山県立第一女子高校（旧制第一高女）から富山南部高校併設中学、高校に進学した女生徒は、高女時代にやったからということで、家庭科は選択していない。統合に際して、送り出す教師たちは、“男子に学力で負けるな”という感じだったが、その点では全く問題がなかったが、体力上の差には愕然としたと語っている。共学大学への進学をにらんでの進学クラスや男子との学力格差是正のための特別授業を、愛知県立第一女子高等学校から小学区制導入により、名古屋市立菊里高校へ転校した女生徒も体験したと語っている。

進学クラスには家庭科はなかったし、特別授業のお陰で、9月に始まった旧制中学との統合校、県立明和高校での男女混合の授業で困らなかったという。一般には統合当時、旧制中学、高女のカリキュラムは大きく違って

いたから、英語、数学等の**男女の学力差は、大きな問題となっていたが**、出身の高女によっても、教師たちの共学を見越してのさまざまな、取り組みの違いによっても、例外は各所で見られたと思われる。愛知の場合は男女共学移行がスムーズに行くように、統合前に部活の交流がなされたり、特に英語の女性教員が積極的な働きをしていたことが指摘されている。

富山と京都の場合も、福岡、秋田の場合と違って、教師も生徒も学区制、男女共学制、総合制の実を上げようといろいろな、取り組みをしていたことが伺えた。これは、アメリカ占領軍の第一軍団が置かれた京都であることや、同じくその管轄にあった富山県のトップ校が指令通りに改革をしていったからということも考えられるが、**教師も戦後の民主化政策を歓迎しており、戦争から解放され、飢餓の中でも戦後復興と民主教育に熱心になり得たから**とも言えよう。

いずれにしろ、カリキュラム上では、共通して自由選択制を採用し、生徒の自主的な学習を形としては保障しようとしていたし、座席もランダム、あいうえお順などもあり、生徒会活動も活発に行われ、フォークダンスも流行ったなど、当時の高校の開放的な側面が多く語られた。しかし、一方で、生徒会役員も多くはまだ、男性だったり、担任教師が「一般家庭」の履修を勧めたりなど、教師にも、女生徒の方にも、それに疑問をもたずに、是認している姿が浮かび上がった。また、女性の行動を制限するさまざまな社会規範もまだまだ多く残っている時代であり、当時の男女共学は学校で男女が共に学ぶということだけでも、画期的なことであったと言える。さらに、自由選択制を保障したことによって、富山南部高校生のように家庭科ではなく、受験科目だけを履修する女生徒も出てくるようになったのである。

また、当時の多くの勤労青年が夜間の定時

制高校に通っていたことや、全日制に行っても、いろいろなアルバイトをして高校生活を送っていたことなどが見られた。男女交際などが寛容に扱われていた富山南部高校の場合は、学力エリート校であったことも関係しているように思える。女子生徒の科目選択の指導などの場面では、対象者の個性も関係するが、それ以上に、教師のもつ女性観やその地域の文化状況、各学校の校風・伝統の違いなどの影響が考えられる。

これらの点から見て、ここでの**男女共学は両性に「教育の機会均等を保障」し、共に学ぶことによって、異性の実像に触れる機会を与えるものであったが、伝統的な女性観・男性観にもとづく社会規範の大枠を前提に成立していた男女共学であったと考えられる。**

最後に、共学後、男子校、女子校に戻った豊浦高校と盛岡第二高校について付言すると、前者については 当時の生徒は、分離に反対であったが、伝統を重んじる OB/OG、特に長府高校同窓会の強い分離要求があり、別学校に戻ったという。毛利藩の藩校系譜の学校だったことが、別学に戻る理由としては、最も大きかったと思われるが、それを許容する地域社会が背後にあったことが伺われる。

後者については、旧制中学・高女等の統合による盛岡高校に入学したはずの男子の内、旧高女の校舎で学んだ男子生徒が在学中に高校の分離に会い、強制的に盛岡第二高校生とされ、しばらくしたら、母校は実質女子校になってしまったという経過である。宮城県では、戦後直後宮城県立宮城第三女子高等学校が男子生徒を 1 学年 10 数人ずつ 2 学年入学させたが、共学化ができないとなって、それぞれ、希望する仙台一高、二高に男子を移動させた。これと比べると、座談会「新制高校誕生」『岩手の教育行政物語』（六三制教育研究会）で、語られている当時の岩手県教育界の状況は、かなり、異なっており、教育の自治と地方分権に関する問題もはらんでいるよ

うに見られる。

旧制盛岡高女を母体とした盛岡第二高校になってもしばらくは、男子生徒が入学してきていたことについて、インタビューでは中学の進路指導の影響が語られていた。この点に関わって、秋田県立横手（美入野）高校に 1951(昭和 26)年に初めて入学した 22 名（花の 50 期生）の女性の回顧録に、(新制)横手第二中学校の担任教師に毎日のように横手高校に受験するように説得されて、学校側に頼まれて 10 数人が進学したとある。他の生徒も各中学の進路指導や担任に説得されて受けたということがあげられている。

ここには、戦後民主主義の実現に向かっていた、当時の教師たちの一側面が伺われる。

#### <第一世代>

新制中学校での共学体験後に高校に進学する世代。1940-46年度生まれ。高卒年は、1959-65年である。

調査対象者の出身高校は、行田女子高校と 1 校 2 舎制をとって、普通科と被服科は別学となっていた新潟県立十日町高校以外は、すべて共学普通科高校である。都立竹早高校と都立豊島高校は旧制高女系譜の高校で、女子の定員が多く（女200、男100）、都立小石川高校は男子の定員が多い（男300、女100）旧制中学系譜の高校である。このような戦前のナンバースクールを前身とする都立高校の場合、男女別定員で異なる合格ラインをもち、男女間に歴然とした学力差があった。川崎市立橘高校、盛岡第一高校も旧制中学系譜の高校だが、橘高校と盛岡第一高校は男女合同定員制の門戸開放型の共学で、当時、女子はまだ、かなり少ない状況であった。時代背景として、高等教育にはまだ、多くの女子大と女子短大が存在し、共学高校でも普通科の実質男女別学、併学形態の学校は各地に散在したという点があげられる。

この世代の調査対象者の多くが 60 年代前半に高校生活を送っているが、全員、女性だったので、男性の意見として述べられている内容の分析は、慎重に行う必要がある。

インタビューを通じて、この世代の共学体験に共通していたのは、

第一に、多くが日常の授業や、生徒会活動、クラブ活動などを伸びやかに行っており、楽しかったと証言していることである。これは、直後世代の解放感の延長上にあるとも見られるが、より具体的な教育活動の場面で、新たな関係性を築き、ジェンダー平等的な体験をしていたことが特徴である。

たとえば、竹早高校では、「担任がほとんど男性教師で、クラス委員も大体出席番号の早い人がやらされたし、終礼もきちんとせず、クラス委員が連絡事項を書いて終わりと言う感じだった」とか、「近くの植物園に、昼休みにお弁当を持って行って、食べて帰ってくるから午後の授業はすごく遅刻していたと思う」という状況が語られている。

橘高校では、徹夜で仮装行列の出し物の制作をし、体育祭の昼休みに練り歩いた。その後、ファイアストームを囲んで、フォークダンスをしたことなどが語られている。また男子との関係性については、通常、女子が少ないので女子は一緒に行動しており、「男の子はあまり問題にならなかったが、試験勉強だけは、放課後残って男女一緒になって勉強した。和気あいあいあとして、何か今の中学生みたいな感覚のような気がする」と語っている。クラブ活動以外は自然に男子、女子が別れてしまうが、あまり、男の子の存在を意識しなかったという意見は、都立高校出身者からも出された。修学旅行は男女一緒に行っているが、竹早は男女別グループで行動していたし、意識の上でもそれほど男女一緒ではなかったが、橘は食堂を選ぶのも教師と生徒が試食して決めるなど、民主的だったという。

小石川高校卒業生は、「飲み屋以外は自由に出入りできたので、最初から浪人するという感じの人は、授業を受けないで近くの映画館や喫茶店、そばやなどに行ったりしていた。職員室に『今日の休講』という掲示があったから、生徒は自由にどこかに行って、次の時間までに帰ってきた。教科書を授業で全部やってはいなかったと思う。やる人は勝手に自分で勉強すると言う感じだった」と語っている。同校は生徒会活動も活発で安保闘争で樺さんが亡くなった時、中庭で集会があったとか、フォークダンス同好会が昼休みにフォークダンスをやっていた、クラブ活動は顧問の先生もいなくて、部室があって自由にやっていたなども語られている。

豊島高校卒業生は、女子クラスと共学クラスを体験し、「3年で指揮者をしたが、混声合唱で優勝した。女声合唱のきれいさと混声合唱の面白さを体験し、いろいろあることの良さが分かった」と共学のメリットを指摘している。

盛岡第一高校の卒業生も男子中心のバンカラ学校で、女子は「いないがごとき」の扱いを受けたと回想しているが、クラスの男子との関係性については、女子がエスケープして、男子が代返しても教員は黙認していたという例を挙げている。ここからは、女子が男子に代返を頼むという仲間関係ができていたことや、元エリート男子校の自由さを女子も満喫していたことなどが推察される。

第二に、当時の人々の高校選択には、まだ、旧制中等学校のジェンダー秩序が働いており、生徒たちの共学体験の内容も、前身の高校系譜に大きく影響されていた。

特に、旧制中学を前身とする高校では、男子校の自由でバンカラな校風を共学になっても継承しており、女子も含めてこの影響下に置かれた。旧制高女を前身とする高校でも、女子校の伝統を守るために女子の多い男女別定員制を支持していたが、この段階では、選

扱科目の家庭科の内容が充実していたなどを除けば、特別、女子優先、男子排他的な動きは見られない。女子系都立高校で一番問題として語られたのは、学力格差であった。

たとえば、女子系の竹早高校卒業生は、「この時期は戦前のナンバーズクール時代の名残があり、女子の学力の方が上だった。男子がそれを強く意識していた。中学時代に自分より、ずっと上位だった女子と一緒にクラスで、『頭上がらなかったよ』と男子は回想している。生徒会の委員長も女子がなり、クラブ活動をやっている人や少数のつきあっている人は別として、そうでなければ、男子には目もくれずに、勉強や生徒会をやるみたいな雰囲気だった」と語っている。

一方、男子系の小石川高校卒業生は、「男女別定員で男子の最低点は820点ぐらいだったが、女子の最低点はそれより、100点ぐらい下げないと、100人を確保できなかった。当時は、まだ、成績の良い女子は女子系の高校の方を受験していたから。入学するからには男子と同じ点数で入りたいと思って、必死になって勉強した」と語っている。このような学力格差を前提とした共学だったことも、ジェンダー平等意識形成には微妙に関係していた可能性がある。しかし、前述のような休講掲示があり、エスケープも黙認されていた高校の中で、標準服さえも作らずに通学できたという自由な高校生活を送っている。

盛岡第一高校は、体育祭は全員参加で、仮装行列は女子もやるが、旧制中学時代からの裸踊り(土人踊り)は男子だけがやっており、生徒会は5人の執行委員の合議制で、執行委員は選挙だが全員男子。女子は1学年314人中45人しかいないので、立候補もしない。「いないがごとき」の扱いだった。弊衣破帽の旧制中学のスタイルそのままの応援団が、入学後1年生を放課後、体育館に集めて、1週間、応援団歌練習をさせられた。「上級生の男子に『そこのおなご』って、言われて、もう忘れ

られない」と卒業生は語っている。ただ、校友会誌の編集委員会には、女子も入っていた。黒い詰め襟の学生服が男子の制服で、女子にも制服はあったが、中には何を来ていても良かったし、マニキュア、眉毛を剃るなども、注意されなかったという。先生が遅れると代表が聞きに行き、自習になったりしたが、休講掲示などはなかった。女子は成績上位者に絞って入学させているため、学力的には優秀な生徒が多かったが、少数のため、男子系の進学高校では、疎外感を抱かせられていたことが伺われる。

一方、女子系の豊島高校では、「休講掲示」もエスケープもなく、男子は詰め襟、女子はブレザーの制服だったが、あまり、性別にこだわりなく過ごしていたようである。

家庭科については、小石川高校は選択科目としてあり、年輩の女教師がブラウスの縫い方を教えていたというが、盛岡第一高校のカリキュラムには家庭科は一切なかったという。名簿も両校はあいうえお順の混合名簿だった。これに対して、豊島高校は、選択科目としての家庭科があり、2年間選択すれば、スーツのような外出時に着られるようなものも制作できるかなり本格的な授業だった。竹早も家庭科は選択で、裏地のついたジャケットなどを制作している。この点では、十日町高校の普通科の場合は女子には「一般家庭」4単位が必修であり、科学的な家庭科の授業が行われていた。行田女子高校の場合は、家庭科は選択科目であった。同時代の私立総合制高校の普通科でも家庭科は1年時に選択科目として週1時間あるだけだったことに見られるように、公私立の共学、別学にかかわらず、ほとんどの高校の普通科では、家庭科を選択科目として置いていたことが認められる。そのため、この世代には、選択しなかったという女子生徒もいた。しかし、インタビューに応じたメンバー全員が、中学校でブラウス、スカート、スリッパ、ズボン、浴衣などを制作し

ており、高校で履修しなくても、技術的な部分は衣生活面では通用すると考えられていたのかも知れない。

対象者の多くは進学コースにいたので、カリキュラムの多くは共通しており、3年で文系、理系に分かれるなどの点でも似通っていたが、共学体験という点で言えば、旧制の男子系高校と女子系高校の状況の違いによって、また、個々の学校の伝統の違いによって、当時の生徒の共学体験が異なるものになっていたことが知られる。

第三に、教員集団が生徒のジェンダー平等意識形成に大きな影響を与えていることが挙げられる。

1)ジェンダー平等視点から言えば、まず、教員の男女比率が問題となるが、前身が女子校か男子校かによって、女性の教師の人数には差が見られた。竹早高校は3分の1が女教員、豊島高校も両方いたというイメージだが、橘高校は養護教諭、司書も入れて女性は4人で、音楽科の教員が家庭科の教員を兼ねていた。盛岡第一高校でも常勤の女性教員は養護教諭だけ、小石川高校の場合も圧倒的に男性教員が多く、十日町高校も普通科の女性教員は家庭科の教師だけというように、男子中心の学校だったことがわかる。

豊島高校卒業生からは、「かくしゃくとした、被服の女教師とか、古文の女教師などのようなしっかりした、自立モデルのような先生がいた」という回想が、十日町高校卒業生からは、「科学的に家庭科を教えてくれて、家庭科の新しい側面と可能性を見せてもらった。これで、自立して食べていける職業として家庭科教師になる進路を決めた」との回想が聞かれた。ここに、見られるように、当時でも、さまざまな教科で働く女性教員は女子高校生の自立モデルになっていたことが伺われる。この意味からも、女性教員の比率を高めることの重要性が指摘できる。

ただ、行田女子高校卒業生は、「(行田女子高には)実科高女時代の古い女教師もまだいたが、若い教師が入ってきた時代で、新しい高校づくりに向かっていた。その結果、文化祭も含めて、共学の普通科高校と同じような教育内容だった」という点を強調している。ここには、女生徒の自立モデルになりうる女性教員の必要性を越えて、性別にかかわらず、新しい高校づくりの担い手になりうる教員が必要だというもう一つの課題が提起されている。

2)生徒参加の学校づくりとジェンダー平等を追求する教員集団

1942年創立という、まだ、歴史の浅い橘高校は、全校で校歌を作成するというように、体育祭や文化祭、修学旅行などの諸行事の運営はできるだけ、生徒参加型にしていた。同校は、「男女共学の真価を発揮する」生徒指導を目標に掲げていたが、これらの取り組みを通して、それを実現しようとしていたのかも知れない。それまでの歴史と伝統に縛られていない市立の橘高校は、教育基本法の理念に則った教育方針をもち、民主教育を追求していたようでもある。

竹早高校や豊島高校では男子が萎縮しないように、女子クラスを作って、残りを男女均等の共学クラスにしたなどの配慮が見られたが、男子系高校では、少数の女子に対して、そのような配慮は見られなかった。女性がある程度いる教員集団と男性の多い教員集団とでは男女共学の作り方に違いが生まれていると言える。

最後に、同時代の女子高校生の異性観について見ることにする。

実質女子校であった、十日町高校普通科卒業生は、「校舎が違ったので、文化祭も体育祭もたぶん、別だったと思うが、フォークダンスを一緒にやったのは覚えている。何かの行事で東校の男子と一緒にやったが、わくわく

したり、緊張して、楽しみではないけど、ドキドキしたっていう記憶がある」と回想している。また、周りに異性がないので、若い男性教師にあこがれるなど、妄想が広がって、別学、併学は思春期の子どもの発達に悪影響を与えると言う。現在とは比較にならないほど、地域の閉鎖性や学校外での異性との交流の機会の少なさが影響してのことであるが、異性の実像に接する事が困難な、別学、併学のもつ欠点を指摘したものである。

行田女子高校卒業生は、「文化祭の時には男子がやってくるので、楽しみの一つだったが、地域に手頃な交流相手の男子校がなくて、生徒会をやっていたときには、中学の友達なんかにか声をかけて来てもらったりした」と回想しており、別学女子高生の気持ちを表現している。

以上のように、当時の高校普通科は、共学校、女子校に関わらず、家庭科はカリキュラムに無いか、選択科目で、女子でも選択せずに済み、体育の授業も共学校では男女別に行われていたが、教育課程としては、ほぼ同じであった。その意味では、まだ、辛うじて、教育課程上のジェンダー平等が形式的に保たれていた時代と言える。

しかし、各学校の系譜、伝統とその時期の教員集団の意識の違いなどによって、休講、部活、生徒の生活の規制、学校行事等でも大きな違いがあり、ジェンダー平等の視点から言えば、さまざまな平等ではない部分を含むものであった。また、高校や大学の選択には、当時、それほど、民間の進学情報が十分でなかったことや、学校の進路指導がなかったことから、学校からの影響だけではなく、親の影響や、きょうだいの影響が大きいことが明らかにされた。

学力上位の女子との共学であっても、バンカラ男子との共学であっても、この世代は、戦前にはない新しい関係、ファイアストームを囲み、仮装行列を共にするクラスメイトを

作り出すようになったことが重要と思われる。

#### <第二世代>

女子のみ高校「家庭一般」が原則として必修となる時代。1947-1956年度生まれ。高卒年は1966-75年

調査対象者の出身校は、当時、女子職業科高校であった御宿家政高校以外の3校は、すべて共学普通科高校である。兵庫県立篠山鳳鳴高校は、篠山藩の藩校を前身とする伝統校であり、都立北高等学校は1952年に新設された普通科高校、都立南葛飾高校は府立16高女を前身とする普通科高校である。対象者の性別は女子2人、男子2人で、1948年、1949年生まれが3人、1954年生まれが1人である。時代背景としては、学校教育で男女別教育が強調されるようになり出した時期。彼らは、60年代半ば～70年代前半に高校生であった。

インタビューを通じて、この世代の共学体験の特徴としては、第一に、第一世代の創出した共学スタイルを踏襲しつつも、男女の関係性という点では、より、**自然に仲間として行動するような機会が増えた世代**である。

たとえば、北高校はやや男子が多く、南葛飾高校はやや女子が多いという男女数で、**クラス編成**は1・2年で共学、3年で文系、理系に分かれるので、就職組の女子クラスと男子のみの理系クラスができたが、他は、すべて共学だった。これは、北高校も共通。**座席の並び方**も女子・女子、男子・男子と同じ性別で1セットになって、それが、交互になっているという並び方や男子・女子・男子と前後に異性がいるという並び方だったようで、意識的に男女の交流を促すようになっていた。北高卒業生からは、男女仲が良かった、今でも当時のクラス名簿（男女別）で、連絡し合ったりしているとの回想。

ただ、進学校であった篠山鳳鳴高校の対象

者は 1973 年卒業のせい、1 年だけ共通の共学クラスで、2 年から文系・理系に分かれたという。受験競争が激しくなってきた時代を反映し、早期のコース分けが出現している。同校は篠山高女との統合校で、男女比が 2 : 1 だが、理系クラスは 45 人ぐらいのクラスで女子は 10 人もいなかったぐらい。座席は完全にフリーで、決まっていなかったが、女子だけが固まるということはないという。

**カリキュラム**に関しては、南葛飾高校は、家庭科は女子のみ 1 年の時だけにあったが、その時間男子が何をしていたかは、記憶が無い。体育は男子と時間帯は一緒に、互いの練習を見学したりした。保健も一緒に、女性の体育教師に教科書通り教えてもらったが、性教育の時間もあった。しかし、理科の実験は男女別グループでやったという。

北高校の場合、体育は男女別で、男子の時間数が多かったから、その時間に女子は家庭科をやっていたらしい。篠山鳳鳴高校は、体育も保健も男女別だったし、3 年だけにフォークダンスがあったが、男女比が 2 : 1 のため、下級生の女子を借りてきて、男女で対になるようにしていた。あこがれの先輩がいるとかそんな 2 年生とかが、志願してきたという。

**行事**としては、文化祭の前夜祭でフォークダンスを踊ったとか、キャンプファイヤーがあって、その周りを踊った(南葛飾高校)や、フォークダンスは、毎昼休みやっていた、運動部は男女で分かれていたが、文化部は一緒に、体育祭は男女別リレーなど種目別で分かれても、クラス対抗なので応援などは一緒にやっていた(北高校)、篠山鳳鳴高校も大体、共通だが、ベスト 4 を狙えた女子バレーボール部以外は、男女同じ顧問が見ていたりして一緒に練習したりしていたという。

修学旅行は、南葛飾高校の場合、行き先について、男女生徒が話し合っただけで、東北に行き、青森からの帰りの夜行列車で、寝な

いで、夜中おしゃべりして帰ってきたという。前年にも、八ヶ岳に同校の寮が出来て、宿泊の移動教室を体験している。

北高校の場合も、男女一緒に関西四国への修学旅行があり、自由行動もすべて、男女一緒に。どちらかの部室に集まって、消灯時間までトランプをしたりして遊んだ。規制された記憶は全くないという。また、同校は 60 年代はじめに制服を無くしており、自由服だった。

篠山鳳鳴高校も別府から南九州をまわる修学旅行があり、男女一緒だったという。

以上のように、男女一緒にの行事でも、それほど、一緒に感じではなかったと言う第一世代の段階から、男女同数に近い高校では、ジェンダー平等的な関係性を作りうる条件が整い、性別に関わらず、クラスの仲間としての関係ができあがっていたことがうかがえる。

第二に、依然として教師の男女比率の差は大きく、また、教員の考え方には、旧来のジェンダー秩序が残存していた。

南葛飾高校と篠山鳳鳴高校では、女性の教員は体育、家庭科、書道などにいるだけで、圧倒的に男性教師が多かった。戦後新設の北高校の場合は、体育や家庭科の他に、英語や国語にも女性の先生がいて、それほど極端ではないが、男性教員が多かった。

篠山鳳鳴高校卒業生からは、体育祭のとき、女子のダンスの代わりに組み体操とか、騎馬戦を男子がやらされたということはないが、1 年生の時に短パン一丁で、男子だけエッサッサをやらされたのが、嫌だった。体育祭の出し物、演技などには担当教師のジェンダーバイアスが影響していたと思うと語っている。

同校は新制になってから、校歌を作り直しているが、応援歌は旧制の「鳳鳴健児の歌」というので、ノーエピソードで歌うようになってい

て、健児というだけあって、内容に女子は入っていない。校訓も質実剛健、勉強第一という旧制中学時代の校訓が残っている。

生徒同士は、女子は男子を君づけで呼び、男子は女子をさんづけで呼んでいた。呼び方とかは結構平等な感じだったという。

第三に、社会の動きや政治情勢に敏感に反応する高校生の出現がある。

北高の場合、生徒会は自主的にやっており、教員から自立しなければいけないというのがあって、生徒総会が始まると教員は退場しなければいけないことになっていた。インタビュー対象者は入学の翌 1965 年に日韓闘争が起き、ベトナム戦争が始まっていたから、生徒会室の窓から北爆反対とかの垂れ幕が下っていたり、ビラがまかれたりしていた。社研の顧問もそういう動きに共感を持っていたように見える。校長が、デモに出ている人がいるようだけれど、よく考えて流されずに参加して下さいと朝会で話していたという。第一世代の竹早の朝会でも、校長がこれと同様の発言をしていた。都立北高校の教員集団は北高デモクラシーという言葉があるくらい、民主主義的な学校をめざしており、やる気のある先生が集まっていた。組合運動も盛んだった。ただ、生徒らから見れば、ほったらかしに見えたという。

第四に、伝統的な女子教育への回帰、別学教育の推進の動きが強化され始める。

この世代は、女子のみ高校「家庭一般」4 単位 が原則として必修となった時代であり、選択から女子のみ「家庭一般」4 単位を必修にした普通科高校も多い。それと同時に、伝統的女子教育への回帰とも言える動向が、女子の職業教育も兼ねて見られるようになっていた。調査対象者の出身高校、千葉県立御宿家政高校もその一つである。同校は水産のための組合立の実業学校から、戦後、旧千葉県

立夷隅高等学校という普通高校になり、1964 年に名称を御宿家政高等学校に変更し、女子高等学校となる。調査対象者はその初年度の入学生である。

彼女によれば、当時は 3 学年合計で 450 人（1 学年 150）という小規模女子高校であった。3 年時に食物・和裁・洋裁・家政の 4 コースに分かれた。当時のカリキュラムでは、全 102 単位中、39 単位が家庭科関係科目で占められていた。たとえば、家庭一般 4 単位、保育 4 単位、被服 1、被服 2、食物 1、食物 2（それぞれ、4 単位）というように。最終的には、スーツやウエディング・ドレスを作るところまでやる。3 年でコース別になると和・洋裁などの場合、被服 3～6 を取るとか、家政科の人は、家庭経営 3 を取ることになる。家庭科関係の教師も 5～6 人いたが、彼らは全員女性教員である。

家庭経営の授業は、ホームマネジメントを導入し、ホームマネジメントハウスという施設があったが、この建物の入り口に「良妻賢母」という額縁があって、今でも鮮明に覚えているほど、強力なインパクトがあった。現在、資料を見ると、学校の教育方針は、真理探究とか、技能鍛錬、国家社会を愛し、相互友愛の精神、社会の進展に貢献する社会人の育成などと書かれているが、ずっと、教育方針は「良妻賢母」だと思っていたと言う。ここは、女性が家庭経営をするときに、どのようにマネジメントすべきかについて練習する場所であった。その成果を家庭クラブ全国大会で発表したこともある。また、学校行事としては、被服検定、食物検定等多くの技能検定が、春秋に行われた。文化祭や発表会で制作作品ショーもやったので、他校との交流などを考える必要がないほど、自己完結的な高校生活だったと回想している。

この卒業生は、同校を「良妻賢母」を育てる学校と認識していたように、そこで身につけた性別役割分業観などが、その後の人生に

も大きな影響を与えたという。同じ第二世代の普通科高校出身の人たちの学校体験とは、きわめて異質な体験であり、ジェンダー平等の視点から言っても、受けた影響は大きく異なっている。同校は、1965年の中教審答申、「期待される人間像」で求められている伝統的な女性役割を担う女子教育を先取的に体現したような学校だったとも見られる。60年代～70年代にかけて、学校家庭クラブの活動は全国的に強まり、それは、第三世代になると普通科高校の女生徒たちにも影響を与えていくことになるが、それは、一方で、ジェンダー平等的な教育で育ってきた女生徒たちの疑問や反発を買うものであった。実際、この卒業生も親の意向で、高校卒業後、直ちに結婚をすることを前提に御宿家政高校に進学したが、その路線に疑問を持ち、高校3年の秋から受験勉強を始めて、親の反対を押し切って、高等教育に進んでいる。

御宿家政高校の教育は戦前の実家高等女学校同様に実技の授業が多くを占めたが、検定試験に象徴されるように家政系の資格取得を同校の特徴として標榜していたという点では、女子にも職業教育をという時代の要求を反映していたものと言えよう。

#### < 第三世代 >

第三世代（1957～1965年度生まれ）は、小学校の家庭科は共学であるものの、中学校での「技術・家庭科」の男女別履修（技術は男子向き、家庭科：女子向き）や高校での「家庭一般」の女子のみ必修が当たり前となっていた世代である。

#### 女子のみ必修の高校家庭科の受容の仕方

今回の座談会参加の女性たちは、総じて家庭科の授業が楽しかったとは証言していない。一人は記憶にないといい、もう一人は浴衣を縫わされたことのみ覚えているという。もう

一人も、あまり面白かった記憶はない。そして、家庭科を女子のみが履修することを仕方がないと受け止めていた。とりわけ、生徒全員が強制的に学校家庭クラブにも入らされていた埼玉女子校では家庭科を全員が履修しているので、違和感がなかった。しかし名古屋共学校は、「どうして育児のことを女子だけが学ぶのか。男子だって将来親になるのに」と、クラスの女子たちと女子のみ必修について唯一批判していた。

女子のみ家庭科4単位必修の授業は、1・2年次に配置されていたものの、埼玉女子校と福岡では、それ以外に3年次の文系女子は家庭科と数Ⅲのどちらかを選択するシステムをとっていた。

なお、私立女子校では、家庭科とは別に「作法」という必修科目があり、期末試験もあり、成績も出ている。

#### 家庭科の時間に男子が履修していた「体育」

男女が同時間に履修していた「体育」とは別に、女子が家庭科を学んでいる時に男子は「体育」を履修していた。その時間を、福岡や名古屋では「体育」と称していたものの、埼玉では「武道」と称していた。授業内容が「武道」であったばかりでなく、授業名も「武道」となっていたのは興味深い。なお、男子校にも「武道」と称する科目が存在した。

この「武道」は1年次にしかなかったという。女子の家庭科は4単位必修であるため、1年次だけでなく2年次にも存在したはずであり、2年次の家庭科の時間に男子は何を学んでいたかはわからなかった。

#### クラスの男女比率

小中学校でも、男女混合名簿ではなく男女別名簿がほとんどであった時代である。男女混合クラスの高校でも、福岡と名古屋は男女別名簿であった（埼玉共学校は不明）。

2年次、もしくは3年次になると、大学進

学の理系・文系、中には国立文系・国立理系のクラス分けが、すべての学校でされている。併学校では、理系・文系のクラス分けで、例えば女子の理系を選択する人数が少なくても、クラスは男女であることを貫徹していた（体育祭や部活は男女一緒）。共学校では、名古屋では理系選択の女子が少なくてもすべてのクラスに男女がいるようにしたもの、埼玉と福岡では理系選択の男子クラスを作っている。

### まだ残る旧制中学校の伝統

旧制中学校の伝統の代表的なものが応援団であったという。男子校では入学式が終わった直後に「応援部」が登場し、応援部指揮のもと吹奏楽の伴奏で校歌と応援歌を「がなる」練習をしたという。

福岡共学校では、女子が少数で一クラスに7、8人しかおらず、校長の祝辞などでもエリートになるのだという趣旨で「ジェントルマンになりなさい」と言い、女生徒の存在は無視されていた。付き合っているカップルへの評価も低かった。他方で旧制中学校の「伝統」が大きく残っており、「文化は男子校」であった。その象徴的存在が応援団であった。それを出身者は、「やくぎのような応援団の人たちからしごかれた」と否定的な表現をしている。応援団には女子がいないものの、応援の際には、男子は詰襟の制服、女子は女子の制服であった。

名古屋の共学校は、学校群制度の入試で入学し、当該校にのみ入りたかったわけではないこともあり、母校の歴史に興味のあまりない生徒たちに対し、教員たちは折に触れ旧制中学校の歴史について語っていた。しかし、応援団はなかった。ちなみに、体育祭の際の応援合戦では、男子は詰襟の制服、女子はボンボリを持ったチアガールであった（福岡の共学校にはチアガールはなかった）。

他に、旧制中学校の流れをくむ男子校の伝統と思われる遠泳と競歩大会（40キロハイク

など）は、埼玉県下では想像以上に活発であった（福岡と名古屋では、どちらもなし）。遠泳は、男子校では存在し、共学校でも実施されていた。ただし、女子校にはない。競歩大会等は、男子校・女子校でも取り組まれていた。共学校・併学校でも実施されたものの、男子と女子で距離が異なっていた。

### フォークダンス

男子校の文化祭か体育祭の終わりに、近くの女子校の生徒などの参加女性とフォークダンスをしている。

併学校でも体育祭の最後にフォークダンスを必ずしていた。ただし、併学校も埼玉共学校でも、女子生徒数が男子に比べて少ないために、すべての男女がペアになってフォークダンスをすることができず苦勞をしている。

### 女子校・男子校の独自性

同性しかいない生徒たちは、性的な話などをフランクにすることが可能であった。

埼玉県下の公立の女子校・男子校は多くの場合それぞれペアになっており、例えば文化祭時に暗幕などの貸し借りをしていた。

また「交歓会」と称するクラス単位の女子校・男子校の交流会もあった。それは、クラスの生徒が担任の教員の許可を得て、相手校のクラスに打診をして了解を得られれば、ホームルームの時間を使ってするものである。

相対的に偏差値の高い学校に男女別学校が残っていることもあり、生徒たちの自主性を尊重し、互いの交流の機会が保障されていたといえる。男女別学校だからといって、異性との接触・交流の機会が閉ざされているのではない点が興味深い。

### 教員の性別

男子校では、女性教員が数人しかおらず、しかも長続きしなかった。まさに「男の世界」が成立しているかのようである。

「文化は男子校」である福岡共学校でも、女性教員は「女子の体育の先生と家庭科の先生ぐらい」であり、女子に教育をする部分にしか女性教員はおらず、偏っている。

同じ共学校でも、名古屋では女性の教員は比較的多く、しかも女性の苦手科目とイメージされやすい物理の教員に女性がいるなど、固定的なジェンダーイメージを覆すモデルとして女性教員が頑張っていた。

### 男子校での生徒を集中させる方法

男子校で授業中に生徒を集中させるために、教員が「猥談」を活用することは散見される。しかし、すべての男子校が同様であるとは思わないものの、この時期の男子校では授業中における猥談は見られなかった。力量のある教員が授業内容で生徒を引き付けようと努力し、生徒側も教師の授業の質を問いそれに応える、そのような緊張関係が成立している所には「猥談」の入り込むすきはない。その好例であると思われる。

### ジェンダー平等教育・性教育

埼玉併学校では、女性の自立について学ぶ機会はなく、逆に「女は女らしく」という雰囲気があった。ただし、性教育はそれなりにされていた。

名古屋共学校では、女性教員が授業後に女子だけ残して、「あなたたち、卒業後はどうするの？」というようなディスカッションをする時間を設けてくれたりし、公ではないところだけれど「女性頑張れ」とのメッセージは学内に存在した。

東京私立女子校では、ジェンダー平等的な内容の授業やしっかりとした性教育がされていた。

埼玉女子校では、キャンディーズの「普通の女の子になりたい」解散コンサートの直後の朝礼時に校長が「君たちは普通の女の子にならなくていいから」と言ったり、国語の教

員が女性の自立などについての新聞記事を年中配っていたり、女らしくすることに対して非常に拒否的な体育の女性教員がいたりするなど、ジェンダー平等についてのメッセージがいわば「隠れたカリキュラム」に含まれているといえる。そのような学校の生徒たちは前述の自主的な交歓会時に、自主的に「女性が仕事を持つことについてどう思うか」という話し合いを小グループに分かれて実施しており、興味深い。

今回の事例からは、共学校では意識の高い女性教員がいればジェンダー問題を考える機会があるとはいえ、女子校の方がより集団的にジェンダー平等を学ぶ機会を生徒に提供しているといえる。

旧制中学校の「伝統」を重視している福岡共学校では、男子にジェンダー視点を提供することはなかった。他方、男子校に性教育をする男性教員がおり、興味深い。

### <第四世代>

第四世代は、1980年から施行されたゆとり教育のなかで育った、第1次ゆとり教育世代である。小学校に入学した前後から授業時間数の削減や、ゆとりを取り入れる教育目標などによって、これまでの世代とは異なったカラーの教育方針が取り入れられるようになったこの世代は、様々な面での転換期を経験している世代でもある。一例として、就職においては超氷河期と呼ばれる時期を経験し、まじめに取り組めばいい就職ができて、いい人生を送ることができるという、これまでの世代の考え方とはそぐわない現実を受け入れざるを得なくなった。団塊世代である親の世代とのギャップや、社会の変化に翻弄された世代と言えるのかも知れない。

第四世代からはA(女性)、B(男性)、C(女性)、D(女性)、E(男性)の5名がインタビューに参加した。

## 中学校時代

A と E は、中学時代、家庭科と技術が男女別で学期ごとに入れ替わるかたちで行われたと述べていた。しかし A の中学校では文化祭で女子だけが家庭科で作ったパジャマをきてパジャマショーをする慣習があったと述べており、家庭科は女子の教科という意識が強かったことが示唆される。さらに A は、家庭科は被服や調理などの技術的なことを学ぶ科目であるという印象をもっており、男女の共生や関係性について学んだという記憶がないとも述べていた。また A は、ほとんどの科目が男女共修であるなかで、家庭科の他にも創作ダンスが男女別修で女子のみで行われていたことを印象的に記憶していた。

B、D、E は生徒会や委員会活動におけるジェンダー問題について述べていた。B のクラスでは女子が委員長、B が副委員長を務めていたが、それが全校集会で発表されたときに、男性でありながら副委員長を務める B に対して「オカマ」という揶揄が飛んだと述べていた。D は生徒会選挙に高い得票数で当選したが、教員が当選者の中から男子が長、女子が副と決めてしまったと述べている。また E も同様に、生徒会長に立候補した女子生徒に対して、年配の男性教員が候補者として不適格であるというような発言をしたのを記憶していた。他の対象者も「女子は副」というのは絶対の不文律であったと述べている。

## 高校時代の学校の雰囲気

共学の普通科の場合、文系と理系にわかれると、男子が理系に多く女子が文系に多いという偏りが見られた。女子校に通っていた A は校則や服装規定が厳しかったが女子校は男子がいないことが気楽で楽しかった、と異性の目を気にせず自分たちで何でもできる開放感を肯定的に評価していた。B は共学であったが名簿は男女別であったと述べている。C

の通っていた高校では個性重視のリベラルな教育を目標としていたが、大学受験を頑張るようという暗黙のメッセージは常に存在しており、本音と建前の矛盾を感じていた。併設して女子校と男子校が別にあったが、男子校のほうが進学校としてのレベルが高かったため、男子校に通っている兄弟からばかにされていたと述べている。家政科に入学した D は私立の女子校的な雰囲気があったと述べている。家政科は普通科に比べて派手な生徒が多く、生徒指導上の注意を受けることが多かったが、普通科からは自由で羨ましいと見られていた。文化祭で郷土料理の弁当を販売するなど家政科は伝統のある学科であった。E は私立の男子校に通っていたが3年生のときに共学化されたことを「詐欺にあった」と表現していた。共学化にあたって、生徒の意見を聞くこともなく「本当の教育を求める」ための共学化であると説明され、今までの教育は何だったのだろうと疑問を感じていた。しかし新聞などから世の中にウーマンリブの流れが起きていることを感じていたため、抵抗感をもつというよりはそういうものだと言いつける気持ちを持っていた。共学化にあたって、トイレや家庭科室が新設され、生徒の名簿を全校生徒に配ることで女子生徒の個人情報配布されることになるのは問題ではないかと議論になっていた。男子生徒の中には、女子が入学してくることで、誰が可愛いかなどを話題にする者もいた。共学化後に赴任してきた家庭科の先生が、教室の汚さに驚いて指導のためのプリントを配布していた。C は女子校は校舎を綺麗にしていたが、併設の男子校は汚かったのでジェンダーの問題なのかもしれないと述べていた。

## 家庭科

高校での家庭科は女子のみ必修とされており、第四世代は男子の家庭科は必修ではなかった。そのため B、E は家庭科の記憶があまり

ないと述べていた。特に共学校に通っていた B は男子が格技をやっている時間に女子が家庭科をしていたと述べている。

A は家庭科は息抜きの時間という印象を持っており、進学を希望していない生徒は 3 年生まで家庭科があったのを羨ましく思っていた。C は男女共修に関心のある家庭科教員が、男子も家庭科を学べるようになったことを熱心に大切なことのように言っていたのを覚えている。調べ学習で参考テーマ例から夫婦別姓を選んでとりあげたこともあり、男女平等意識の高い教員だったのだろうと述べていた。

D は家政科出身であるため、カリキュラムが普通科と異なっており、教員も家庭科に熱心に取り組んでいたと述べている。また、学校家庭クラブ（全国高等学校家庭クラブ連盟；高校家庭科の学習内容の発展を推進するための全国組織）の活動も盛んであり、ボランティア活動にも参加するように言われていた。D の学年は家政科のみが学校家庭クラブ活動をしていたが、少し下からは普通科にも導入されていた。このように家庭科が普通科や男子生徒にまで広がっていく過程で、家庭科を専門に学んでいた家政科では専任教員を中心に、「学校家庭クラブは家政科のもの」という風潮が薄まることへの抵抗感があったという。D の在学中に普通科（共修）では男子も家庭科をやるようになったため「自分のやることを取られたような気持ち」がしたと述べていた。

また、家政科の専任の先生にから家政科は伝統があると言われていたが、一方で社会科・公民の先生などから授業中に「家庭科は女子だけの教科じゃない」というメッセージも受け取ることもあり矛盾を感じていたと D は述べている。

## 体育

共学校の B, D は体育は男女別で行われていたと述べている。B は格技で柔道と剣道の選

択を行っていた。D は女子が創作ダンスをしている間、男子は太鼓と器械体操を取り入れた演目を練習し、体育祭でそれぞれが発表していたが、男女があまりに違うことをやっている印象を持っていたと述べている。

## 学校行事

A は文化祭で男装をしたり、体育祭で女子ばかりで応援合戦をしたり自由な雰囲気を楽しんでいたと述べている。

B の高校では文化祭はクラス単位で出し物などを企画したが、体育祭はなく代わりに陸上競技大会があったが、個人戦であったためクラスで何かをするということにはなかったと述べている。修学旅行は男女混合の班だったが、自然とそうなったのか指導があったのかは覚えてないと述べている。他にマラソン大会や球技大会があったが、どれも男女別に行われていた。当時の写真にはポンポンをもって応援している女子が写っていた。A は共学だった中学時代にはポンポンを作るのは女子の役目であったと述べていたが、B は特に男子が競技をして女子が応援をするという形式ではなかったと記憶しており、女子のほうがそういう小物を作りたがる人が多かったのではないかと話している。

D は地域のライバル校との球技大会が毎年あり、男子のみで行う応援団活動があったと述べている。E は体育祭も盛り上がりたい人だけで盛り上げる感じであったと述べていた。また修学旅行は教育的効果がないという理由で行われていなかったとのこと。

## 校歌・校訓

校歌については全員が、ジェンダー平等に問題があるような歌詞はみられなかったと述べている。B の高校では「おとめ」「おのこ」というかたちで男女双方について言及されていた。D の高校の校訓は「質実剛健」でありバンカラな雰囲気が残っており、家政科があ

るにも関わらず「女子はいないぞって感じ」があったという印象を持っている。C の学校では 70 年代に生徒会が自主規制的な校則を作っていたが、教員からは「生徒らしさ」の押しつけがあったと述べており、自主性の尊重という理念との矛盾を感じていた。

#### 制服

C はここでも、個性重視を謳っているが制服の規定がある矛盾を述べていた。この世代はファッションとしてスカートが長い時期であり、ルーズソックスが流行り始めた時期でもあった。ポケベルという新しいコミュニケーションツールの普及もあり、援助交際やブルセラといった問題も世間では騒がれていたが、地方都市の高校生としては「都会ではそういうことがあるらしい、信じられない」と感じていたと述べている。また共学校では女子は臙脂色、男子は紺の上履きを使うことになっているなど、性別によって区別される経験がみられた。A の高校は就職する人も多くいる学校であったため、制服の規定が厳しく、スカート丈や着るものの色、靴の厚さまで「高校生らしさ」を重視した規則が多く存在していた。制服について D は、地域に私服の高校がなかったため、制服や学年を示すリボンや校章の色などで外的には身分を示す効果があり、内的にもアイデンティティを確立する効果があったのではないかと述べていた。

#### 考察

以上から見られるように、第四世代は中学・高校をとおして強固なジェンダーバイアスが当然のものとして存在していたと考えられる。

また A のように、女子校の異性の目を気にしない感じを肯定的に評価する意見も見られた。しかし男子校に対する肯定的、否定的な評価はともに見られなかった。高校当時セクシュアリティの問題に悩んでいたという対象

者のひとは、当時、セクシュアリティは大きすぎる問題で、その時代や学校というものに諦めを感じていたと述べている。

始めに述べたような時代背景の影響があるのか、第四世代へのインタビューからは社会の変化への戸惑いや管理されることに対する閉塞感というものが強く感じられ、ジェンダー平等の問題のみならず課題の山積していた世代であったという印象を受けた。

また中学高校における家庭科の履修に関しても 1972 年度～1975 年度生まれである対象者たちは転換期を経験している。1989 年の学習指導要領改訂(1993 年実施)にともない、中学校では「生徒の特性などに応じて、どの領域を履修させるか検討することが必要である」と、女子特性論の余地を残しながらも、性別履修指定制が撤廃された。また 1989 年の学習指導要領改訂(1994 年実施)においては高校における「家庭一般」の女子必修制度が廃止され、「家庭」に属する「家庭一般」「生活技術」「生活一般」のうち 1 科目が男女ともに必修となった。学校によっては改訂の実施を見越して実施年に先行して、履修制度を改編しており、特に家政科という家庭科に特化した学科で高校時代を過ごした D の発言からは、指導要領の改訂による現場の動揺やジェンダー意識の揺らぎなどが感じられる。

#### <第五世代>

戦後第五世代(1978～1986 年度生まれ)は、それまで男女別修が基本であった家庭科において、男女が同じ単元を同じ単位数取得することが基本となるなど、高校教育のカリキュラムにおける男女平等が施行された世代である。また 1986 年には男女雇用機会均等法が施行されていることもあり、法的にはもちろんのこと、社会的にも男女の平等を当然のものとする考え方が受け入れられつつある世代であると言えよう。

そのような時代背景のなかで、同じ公立高校でありながら男子校、女子校、男女共修の共学校、男女別修の共学校（ただし対象者は共修クラスに在籍、また対象者の卒業後に別修クラスは廃止されている）という環境で学んだ4名の多様な経験や考えを聞くことができた。

対象者の4名は、全員が地域では比較的偏差値の高い進学校に在籍していた。共学校は2校とも、新制高校発足時に旧制中学と高等女学校が統合した統合型であり、別学校は2校とも旧制中学校（男子校）および高等女学校（女子校）から別学のまま新制高校に移行した単独移行型である。学校の規模は4校とも1学年が9～11クラスから成っており、1学年の生徒数は450名前後であった。

#### 家庭科 ～ジェンダーバイアスを受けやすい別学校～

前述のとおり家庭科においてカリキュラム上は男女の別がなされていないため、全員が同じような家庭科教育を受けていることが期待されたが、その内容は生徒の性別によって違いが見られた。男子校出身者は調理や被服などの実習ではなく、コミュニケーションや就寝場所の選択など、いわゆる家事労働ではない分野を印象的に記憶していた。実際に対象者の高校では調理実習は1度しかなかったが、他の男子校では卒業後に一人暮らしをする際困らないようにと積極的に調理実習を取り入れている学校もあるようだ。一方で、女子校出身者は、OGの教員による被服、調理の実習および講義が熱心に行なわれており、厳しい授業であったと記憶していた。その背景には教員の、家庭を担う女性を育成するという意識があったのだと思うと彼女は語っていた。別修共学校では、対象者が理数科（理系特進クラス）だったためか、大学受験に関係のない家庭科の未履修があり、3年次に急遽家庭科の授業が行なわれた。また、男女別

修が多数を占める校風ゆえか、共修クラスにおいても名簿は男女別になっており、班ごとに分かれての実習や活動では男女が別々に作業をするという現象が見られた。共修共学校では、名簿による班編成も、クラス編成も男女混合であったため、家庭科は講義および実習において常に男女共修で行なわれていた。また授業では調理や被服などのほか、夫婦別姓についてのディスカッションが行なわれるなど、新しい話題に触れる機会もみられた。

以上を踏まえると、家庭科においては別学よりも共学において、性別の考慮のない教育が行いやすいのではないかと考えられる。また大学受験に必要な科目であることから、学校や教員独自の裁量が行いやすいことが伺える。それにより、生徒の特性や興味を踏まえたカリキュラムを組むことができるという長所がある反面、教員のジェンダーバイアスが色濃く反映され、ジェンダー平等的な教育が行なわれにくいという可能性も示唆される。

#### 体育 ～共学校における種目選択の男女不平等～

2校の共学校でも体育は基本的には男女別で行われていたため、4名の対象者全員が体育は同性のみのクラスで履修したという印象が強かった。

共修共学校では球技や武道とダンスなどの選択種目において、男女共修で行われる場合があった。また共修共学校において、女子は自主的にダンスを選択する者が多いものの武道も選択できるようになっており、その点では男女平等の方針が取られていた。しかし共修・別修ともに共学校では野球やサッカーなどの、当時男子のものという風潮の強かった種目においては、女子は事実上選択することができないようになっており、男子の方が選択できる種目が多くなっていた。共学校の女子は選択できなかったサッカーだが、女子校では女子のみでサッカーが行われていた。し

かし武道選択はなかった。男子校では文武両道が掲げられていることもあり、体育には力を入れていた。共学および女子校で見られない種目としては、ラグビーがあった。

女子校で武道、男子校でダンスが選択できなかったという点からもわかるように、別学校にも選択の幅が狭められている現実があった。しかしより問題とすべきは共学校で共に学んでいながら性別により選択できる種目が異なるという点であろう。

確かにサッカーや野球は男子のほうが競技人口が圧倒的に多いと考えられる。また既に男女の体力差が顕著に見られる高校の体育において、全く同じ条件で競技を行うことには無理があるだろう。しかし上手い生徒が下手な生徒に教えるといった指導方針を取ることや、ルールを変更し、男女がともに競技できるような工夫を行うことも可能であったと考えられる。武道とダンスという比較的ジェンダーバイアスの強い種目の選択においては平等な選択が行われていたにも関わらず、球技選択においては女子のサッカー希望者が、少なくとも1名いたにも関わらず、授業内容の工夫ではなく選択制限という解決法がとられたのは残念なことである。ただし対象者も言及しているように、そもそも女子のサッカー、野球選択者が少なかったということも事実であり、生徒側にもジェンダーバイアスが存在していたことが言えるだろう。

近年、我が国において女子サッカーの発展がめざましく、また当時は知られていなかったフットサルという競技が普及した現在、そのことが今後の高校の授業での女子のサッカー選択や授業内容の工夫にどのように影響するのか、また依然として男性の競技と見なされている硬式野球との比較検討を行っても興味深い結果が得られると考えられる。

保健 ～単元によるジェンダー差／授業内容の差～

共学校において、保健の授業はクラス単位で行われていたため男女共修であった。男子校では家族計画の単元のなかで、マスターベーションの話から避妊の話につなげるなど、共学校や女子校にはない、男性同士の連帯感を利用したアプローチの仕方が見られた。また女子校では出産のビデオを視聴するなど、女性の生殖についての積極的な取り組みがなされていた。さらにそういった性や生殖の単元の授業の際に生徒が若い男性講師をからかって楽しむといった現象がみられた。女子生徒が男性教員に対して性的なからかいを行う傾向は、共学校の女子には見られなかったため、女子校特有の現象である可能性がある。

4名とも進学校の出身であるため、大学受験に必要な保健にはあまり力が入れていなかった印象をもっている。そのなかでもどの教員が担当になるかによって、積極的な取り組みが行われる授業と、教科書を読むだけで終わるような授業とに分かれていたという印象を持っていた。

以上のことから、保健においては別修か共修かによって力を入れる単元が異なっていることや、単元や教員によって授業内容や学習の程度にばらつきが生じている可能性が示唆された。

またこれまで述べてきたように、家庭科、体育、保健は教員の持つジェンダーバイアスが比較的授業に反映されやすい科目である。しかしそれらが全て、大学受験に必要な科目であることから、ジェンダーバイアスの是正がなされないまま授業が行われていたり、教員の個人的な信条や思想が授業内容に大きな影響を与えていたりといった問題が生じやすい。ジェンダー平等に配慮した授業内容や、性差があることを契機にジェンダーについて考えさせるような目標設定のある授業を行える、意識の高い教員の育成が必要なのではないだろうか。

学校行事 ～ステレオタイプの男子校／脱ステレオタイプの女子校～

対象者の男子校は文武両道を教育目標として掲げていることもあり、遠泳や40キロハイクなど、体育系の行事が印象的であった。特に遠泳は、OBの指導が入り、行事を通して新入生が生徒として認められるといった通過儀礼のような側面を持っていた。体育祭においても強さ、男性らしさを誇示するような種目が見られた。別修共学校にも競歩大会があったが、距離は男女で異なっていた。また対象者の男子校では応援団が厳しく校歌指導などにおいても、新入生を養成するためのしごきの要素があった。共学校および女子校でも校歌指導や応援団・チアの存在はあったが、厳しいという印象のものではなかった。

対象者の女子校では体育祭や文化祭が活発であり、共学であったなら異性の目が気になってできないような仮装をして楽しむという習慣があった。また共学の対象者は、学校行事において意識的にはないが自然と、男子は大工仕事や力仕事、女子は繊細な作業やコミュニケーションの必要な作業を請け負うことが多かったと振り返っていたが、女子校では衣装の作成から大工仕事まで全て自分たちでやっていたと述べている。

このように、男子校では男性らしさのステレオタイプが強化されるような行事が多く行われていたが、女子校では異性の目を気にせず女性らしさにとらわれない開放的で自由な雰囲気の中行事を行っていたという大きな違いが見られた。共学校では男女が共に存在しているため、自然と既存の性役割に近い分業が行われていた。対象者の通っていた女子校はレベルの高い進学校であるため、特に自立心の強い生徒が集まる傾向があったと考えられるものの、女子が自主自立の精神を育むために、女子校の存在が肯定的な役割を果たしている可能性は充分にあると考えられる。

また、別修共学校では文化祭などの行事で

男子クラスと女子クラスがペアを組む、男子校では近隣の女子校との合同ホームルームが設けられるといった習慣があった。これらは別学や別修という制度を採用していながらも、異性のいない空間は不自然だと考え、男女を交流させようとする学校側の意図が存在していることを示唆している。しかし生徒の立場からすると、別学校で校内に異性がないことは自然に受け入れられることであり、逆に共学化することによって、その学校の良さが失われると考える人が多いようであった。

校風・ジェンダーや身体にかかわる意識 ～ハラスメントを許容する風潮のある別学校～

4校とも地域ではレベルの高い進学校であったため、男女関係なくプライドや自立志向の高い生徒が多い傾向があることが共通していた。

男子校では生徒集会などで衣服を脱ぐことを促すかけ声上がるなど、全校生徒で共有している下ネタが多数あり、「バンカラで下品」な校風があったと述べられていた。また男子校においては女性教員を少し見下すような風潮もあり、教員が独身であることをからかうようなあだ名をつけるといった事例があった。問題なのはそのような校風を望んで進学するというよりも、学力に合わせて進学したらそのような校風であったというケースが多いということだろう。共学校、女子校では、全校生徒で共有されている下ネタはなく、特に共学校では男子のほうが多い理系クラスであっても、女子に配慮して下ネタを控えるなどの傾向が見られた。しかし女子校では、教室での更衣時などに教室を出ようとする男性教員を性的にからかうような風潮があり、異性の教員に配慮するという意識があまり見られない。

また身体感覚においては、女子校および別修共学校の女子クラスでは月経用品や身体を隠すという意識が比較的薄く、女同士だから

気にしないという意識を持っている生徒も多くいたようだ。男子校においても男性教員の授業では下着姿で授業を受ける生徒がいるなど、異性の目のないところで性を意識しないという風潮が見られ、そういった行動は教員にも黙認されていた。

ここでも学校行事と同様に、男子校では性的興味の強さといった男性性ステレオタイプが強まり、女子校（女子クラス）では、恥じらいや慎みといった女性性ステレオタイプが弱まるという傾向が見られた。このことから、男性性ステレオタイプは男性が同性間の仲間意識を高めることと関わっているが、女性性ステレオタイプの一部は、女性が他者（特に異性）の視線を気にすることで強く成立するのだということが示唆される。また別学校に見られる教員へのセクシュアルハラスメントを許容する風潮は、ジェンダー平等意識を育むためには早急に対処しなければならない問題であると考えられる。

また別修共学校においては、中央の共修クラスを挟んで、左右に男子クラス・女子クラスが並んでおり、男子クラスはバンカラな男子校的な要素、女子クラスは華やかな女子校的な要素をもっており、クラスのイメージは全く異なっていた。また、共修クラスの女子と女子クラスの女子のイメージも異なっており「(女子クラスは) みんなが可愛くてキラキラ」と述べられていた。この点については男子の多い理系クラスに属していた共修共学校出身の対象者も同意している。このことから、別学および別修クラスではもちろんのこと、共修クラスであっても、男女の人数比によってクラスの雰囲気は大きく変わる可能性が考えられる。高校では選択科目履修時の利便性を重視したクラス編成が行われることが多いと思われるが、杉田が述べているように、クラスの男女の人数比が生徒のジェンダー平等意識形成に及ぼす影響は少なくなく、考慮すべき事柄であると考えられる（杉田真衣「男

女共学・別学と男女平等教育～女子校における女子のエンパワーメントと共学化後の課題～』『科学研究費補助金研究成果報告書；男女共同参画社会における男女共学化、共修化の研究』2006年 pp. 31-55)。

#### 校章と制服

共学校は別修・共修ともに、男女の校章が別であった。これは全国的にも少ないことであるが、両校とも新制高校として統合される以前の男子校、女子校の校章がそのまま使われており、異性の校章を身につける機会はなかった。別修校では学校全体を表す際には男子の校章が使用されていたが、共修校では男子の校章に寄り添うように女子の校章が並んでいるものが使用されていた。共修校出身者は当時、どうして男子の校章のほうが中央にあるのかと疑問や不満に思っていたと述べているが、統合後には男子の校章が使用されるケースや全く新しい校章を制定するケースが多く、女子の校章が校旗などに描かれているのは珍しい。このことから、対象者の通っていた共修共学校はもともと女子が男子と対等な力関係にあり、平等意識の高い学校であったのではないかと考えられる。

共学2校は制服があり、別学校は1970年代に私服化されて以降、制服は存在していなかった。制服の着こなしについては、別修共学校において、共修クラスだけは、男子がいるので着崩さないようにという指導が教員からされていた。しかしそのような異性への配慮が求められる一方で、学校全体が別修であったため男女別の更衣室が存在せず、共修クラスの生徒は教室を譲り合って着替える必要があった。着替えの際の不便さだけでなく、異性の出入りする教室に脱いだ衣服を置いておくということが問題であったと対象者は述べていた。また別学校においても更衣室はなく、教室で着替えるのが普通であった。

共学／別学であるということ ～出身校の形態への肯定感と、切磋琢磨できる共学校～

別修共学校では、男女クラスが分かれていることで競争意識が芽生え、学力が向上するのではないかという意見も見られたが、現在、対象者の母校は共修化されており、卒業生の視点から見ると、学校全体の成績は上がっているのではないかという印象を持っている。また、女子校の運動部に所属していた対象者も、大学の部活において男女混合で練習するようになったことで、男子のよい部分を発見できたため、パフォーマンスの向上のためには男女と一緒に練習することは良いことかもしれないと考えていた。しかし彼女は、前述したように、異性のいない環境で学校生活を送ることの楽しさを肯定的に捉えている。また、男子校出身者も、先輩や応援団からの“試練”があったものの男子校は楽しかったと述べている。

共学・別学に関わらず、自身の出身校への思い入れや肯定感があるのは自然なことであり、どちらに利点が多いかを一概に述べることは難しい。ただ、男女別学・別修には、良くも悪くも同性間の親密さや絆のようなものが強く発生する傾向がある反面、男女がお互いの利点に目を向け切磋琢磨する姿勢が失われる面という特徴があるのではないかと考えられる。

### 3. 終わりに 研究の限界と今後の課題

最後に、ジェンダー平等という観点から、一点考察を加えたい。

みなぎる解放感のなかで新教育制度を体験した直後世代や、同じく、第一世代も戦後復興と民主教育の雰囲気の中で高校生活を過ごしている。第二世代では、学習指導要領が官報に公示されることによって法的拘束力をもつようになるなど、伝統への制度的な回帰がはじまっており、家政科高校卒業者のインタ

ビューからも伝統的な女子教育への回帰の様子をうかがうことができる。

そのような意味で、続く第三世代には、次の二つの理由から、最も大きい着目点があるように考える。

一つ目は、第二世代から見られた、伝統的な女子教育への回帰や、別学教育の推進の動きがより強化されているという点である。例えば、進学校であっても、女子のみが家庭科を履修することに加えて、女子は学校家庭クラブに全員が強制的に入会させられている事例もあった。さらに、文系コースの3年生では、数Ⅲか家庭科かのどちらかの選択となっていたことも、女子のみに家庭科を強化させるねらいがあったと考えられる。一方、男子も体育が増単位となっており、埼玉の事例だが、「武道」と称される科目も実在していた。

二つ目は、このように制度的に進む伝統回帰の流れへの反発も、他方では、強まっているという点である。高度経済成長の過程で大量消費社会が進展し、第三世代は子ども時代からテレビ視聴するなど、それ以前にくらべれば、圧倒的な情報量の中で子ども時代を過ごしている。また、第三世代が高校生だった時期には、すでに高校進学率が90%を超え、高校進学率の男女差もほぼなくなっており、男女ともにいるのが当たり前な中学校(義務教育)文化を、高校に流入させている。加えて、1972年の第27回国連総会で1975年を「国際婦人年」とする決議がなされるなど、ウーマンリブ運動が世界的に高揚していた。

そのような背景の中で、女子のみが学校家庭クラブの提出物の作成に追われたことに不満を募らせた者もいるなど、制度的な伝統回帰への反発が目立ち始めている。また、女子校では、女性の自立について取り上げる国語教員や、女らしくいることに拒否的な体育教員がいたり、共学校でも、女子のみで女性の自立についてディスカッションする場が設けられたり、ジェンダー平等について考える機

会が教員の側からも提供されている。

つまり、伝統への制度的な回帰の流れの一方で、それがすんなり受け入れられているわけではなく、むしろ、それへの反発と衝突が最も顕著にあらわれているのがこの第三世代の最大の特徴であると考えられる。

第四世代に入ると、中学校では技術・家庭科の男女相互乗り入れが開始され、伝統への制度的な回帰の流れも停滞してきている。男女雇用機会均等法が施行されたのが1986年であるから、高卒の場合は1967(昭和42)年度生まれ(第四世代の2年目の生まれ)、大卒の場合は(4年制大学で留年や浪人期間がない場合)、1964(昭和39)年度生まれ(第三世代の終わりから2年目の生まれ)の就職活動から適用されている。続く、第五世代では、カリキュラム上の男女差がついに解消され、高校では家庭科が男女共修となり、1999年には男女共同参画社会基本法が制定されている。伝統的回帰とそれへの反発という図式は、第三世代以後は、徐々に小さくなっていったと考えられる。

#### 研究の限界と今後の課題

本調査で協力いただいた第一世代の対象者は結果的に全員女性となってしまったため、今後は、男性の対象者を中心に増やしていくことはもちろん、第一世代に限らず、対象者をできるだけ、多様な地域と階層から抽出し、調査を積み重ねていきたいと考える。また、本調査でのインタビュー対象者は、全日制普通科高校、特に進学校出身者がかなりの割合を占め、職業科高校出身者や定時制高校出身者はかなり少人数である。進学校出身者を中心に限ったある一側面をすくい取っているにすぎないという本研究の限界は明らかである。ただ、かなり少人数であるものの、職業科高校や定時制高校出身者の語りは、普通科進学校出身者とは異なった男女共学体験がそれら

の高校において形成される可能性を大きく感じさせるものであった。さまざまな職業科高校の出身者や定時制高校出身者を対象に、また、より多くの地域の出身者に、インタビュー調査を積み重ねていくことの必要を痛感する。

また、世代分け区分についても、単に学習指導要領のみに対応させるだけではなく、社会背景や法整備も加味して、精緻化をはかる必要がある。さらに、インタビューガイドについても、日本人の〈性〉(ジェンダー・セクシュアリティともに含めて)の形成を捉えていくためには、たとえば、セクシュアリティに関する時代的指標となる項目(例えば、婚前交渉の是非、離婚に対するハードル、性的少数者への理解、ピルの使用等)をくわえつつ、全世代共通の質問項目とそれぞれの世代にふさわしい質問項目も用意するべきであろう。

#### 謝辞

インタビュー調査に応じていただいた各世代のみなさまに心から感謝いたします。

なお、本研究は、平成21~23年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究」(課題番号21330183、研究代表者・橋本紀子、研究メンバー・田代美江子、井上恵美子、井谷恵子、木村浩則、杉田真衣、良香織、茂木輝順、森岡真梨、丸井淑美)の一環として行われたものである。

本稿は以下の分担により執筆されている。

1. はじめに…橋本、茂木
2. 調査結果の概要  
直後世代・第一世代・第二世代…橋本  
第三世代…井上  
第四世代…森岡、良  
第五世代…森岡、茂木
3. 終わりに…橋本、茂木